

1

キミエのことはほとんど知らない。

イチロおじさんの家に彼女の白黒写真が一枚ある。縁がギザギザの黄ばんだ写真、ほかのたぐさんの同じような古い写真といっしょにシャツの空き箱の中で紛れている。だれが彼女のことを覚えていたろう？ 男と女、ある瞬間身を据えても、いずれ時が退出させる。時——それは宙を正確に射る矢が作る軌道に似た不屈の一直線、問答無用の特異な規律——それがイメージを染みて汚し、いくつかを消し去り、言葉にざわめきを刻んだかと思えば、すぐに発話されたことに疑念がはさまれ、あるいは空隙を埋めて、見えるように輪郭を強調したり白地の紙上に線と色を創り上げたりする必要が生じる。言葉を信じてはいけぬ、たとえそれがおじいさんのものであっても。そのおじいさんの記憶にぼくはキミエの痕跡を探しているが、信じてはいけぬ。イ

チロおじさんのもそうだ。彼は、父親が最初の妻のことをときどき話していたから、おぼろげながらもその人となりや記憶に留めた。だがぼくがこの色あせた写真の向こう側に持っているのは、そして見ているのは、小柄で痩せっぽちで、仕事の支度を済ませてオジイチャンの横で縮こまる女性。首までボタンを留め、長い袖が手首のところで閉まる明色の服に身を包み、しわだらけのズボンをはいている。頭と首には日焼け防止の布巾。そのおどおどとした目は、前を見ているがカメラをみつめてはいない。その奥には古い家の正面、時と汚れで黒ずんだ木造の、以前住んでいた家だ。

イチロおじさんは、もうはるか昔におじいさんから聞いた彼女の話をつくつかしてくれた。オジイチャン自身ももう忘れていたこと。雌鶏に情が移り、殺すことを拒んで森の奥に連れていき、締められないように逃がしてやったこと。ある日、コーヒーの木の根元を熊手で引っ掻いていたら、葉といっしょにアシナシイモリが出てきて気絶したこと。移住地に住んでいたある黒人女性と友達になったこと。祈禱をし、お茶を入れて病人を治す女だった。それを聞いてぼくは、どうやって日本から来たばかりの日本人移民の女性と黒人女性が一九一〇年代に友だちになれたのだろうかという想像した。

オジイチャンは、キミエとおばあさんを比べ、まるで違ったと言った。キミエは臆病で身体が弱く、きつい農作業には向かなかった。そして話した。長いあいだ笑ったことがなかった笑いを

笑いながら。遠い過去から持ってきた笑い。あいつはな、ブラジルで雪を待ったんだよ。ぼくが驚いているあいだに、その笑いは次第に物憂げな笑みに変わっていった。この時点で顔に出ている表情と疲れた目に、あの過去から持ってきた苦悩が浮かんだ。ぼくは言った。

「会ってみたかったな」

「何のために？　なにひとつちゃんとできんかったし、話すらろくにできんかった」

しかしぼくはキミエに惹かれ、興味を抱いた。彼女のことを登場人物として思いめぐらした。サンパウロ奥地のある農場で雪を待つことから生まれただけか。

ぼくがまず彼女の姿をみつけたのは、日本の神戸港からブラジルのサントス港までの長旅をする船の中だった。

黙っていた。ぼくが想像したのは、夫ヒデオの横で、ずっと黙ったまま俯いて、縮こまる彼女。髪はしばっていたが乱れ、ほつれ髪がこぼれていた。着物は粗末で、白地に薄桃色の水玉模様で、くるぶしまで覆っていた。足は白足袋と、布の鼻緒のついた藁草履。そんな彼女は実際より小さく見えた。ほとんど存在していなかった。

その後——別の時刻、おそらくは夕方ごろだった——男たちが楽しそうにそれぞれの計画を話すのが見えた。ヒデオの隣にいた一人が自分の計画を披露し、自分の夢を共有してもらおうと大声で話していた。ブラジルには四、五年いるつもりだ。

「年月なんてあつという間さ」と笑顔で言いながら、一服しようとパイプを準備する。

いずれポケットいっぱいのお金で横浜に小さなレストランを開き、特製のシヨユでサシミを出す。うちの女房にしか作れない特別なやつだ。

「なあ、マリチャン、そうだろう?」

ライバルたちをあつと言わせる。

「なあ、マリチャン、そうだろう?」

少し離れたところで他の女性たちと話しながらも夫を気にしていた妻が同意した。

「ハイ」

また別の男は、神戸港の霧雨の下で長いあいだ過ごしたために引いた風邪のせいで鼻をすすりながら言った。また戻ってきて田んぼを耕したい、自分にできるのは土を耕すことだけだから。

三人目は、米国向けの絹の輸出が減少したことを嘆いた。実家が養蚕農家だったが、買手がつかず、突然生産できなくなり、ブラジルへ行く以外に道は残されていなかった。父親と二人の兄弟といっしょに行くところだった。母親は日本の祖母の家で残った。出発数日前に課された健康診断で、トラコーマがみつかり不適格となったのだった。目やにだらけの赤い目が家族とともにブラジルへ行くことの妨げになるとは知らなかった。甲板の床を見ながら男は嘆いた。すべてがものすごく辛い、まさか日本を出ることになるなんて考えたこともなかった。涙を流す母親を港